

青年期の妬みに関する心理学的研究

—中学生の自尊心と対人態度が妬みに及ぼす影響—

津江 美和¹・馬場園 陽一²

(¹高知福祉専門学校非常勤講師・²高知大学人文社会科学系教育学部門教育心理学研究室)

A Psychological Study on Envy in Adolescence : An Influence of Self Esteem and Interpersonal Attitudes on Envy in Junior High School Pupils

Miwa TSUE¹ and Yoichi BABAZONO²

¹*Kochi Welfare Specialist College* : ²*Laboratory of Educational Education Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University*

Abstract: The aim of this study was to clarify how self esteem and interpersonal attitudes influence on envy in high school pupils. Envy consists of two subscales of emotion and coping strategy. As a result of factor analysis, five factors in emotion and four in coping strategies were found. Path analysis was performed to examine the relation from emotion to coping strategy, self esteem to emotion and coping strategy and personal attitude to emotion and coping strategy. The main results indicated that self esteem influences on dejection, refusal, challenge and confinement, whereas ambivalent factor in interpersonal attitude scale influences on all factors in emotion of envy. From these results, we discussed about the nature and characteristics of emotion and coping strategy in envy that are complicated concepts.

キーワード : 中学生, 妬み感情, 妬み行動, 自尊心, 対人態度

目 的

中学時代には、友人関係が重要となる。また、自分に適する領域が何であるかを考え始める時期でもある。自分が大切にしたい領域で優越する友人が出現するという場面に、何度も遭遇するであろう。自分にとって重要である領域における友人の優位性は、親しみや共感をもつ反面、どちらかの優越により妬み感情を抱いたり、抱かれたりを経験する。人間関係の持ち方や対人スキルも十分に成熟していない中学生にとっては、大きな悩みとなることもある。本研究では、妬み感情に向き合い、望ましい方向に向かって自己を見つめていくことが思春期の成長課題の1つであるにとらえ、妬みの感情特性や対処行動のあり方について検討していきたい。

1. 妬み感情とは

妬み感情とは、どのようなものであろうか。妬みに相当する言葉として、英語圏では *jealousy* と *envy* が挙げられてきた (Parrott and Smith, 1993)。新英和辞典によると、「*jealousy* とは *envy* より個人的な感情で優越者を妬み憎悪する感情であり、*envy* は他人の持っているものを自分ももちたいと羨む気持ちである」と定義している。これらの二語の邦訳では *jealousy* は「しつと、やきもち、ねたみ」、*envy* は「ねたみ、しつと、うらやみ」といった訳語が充てられており、意味的には混同がみられる。Parrot (1991)、Parrott and Smith (1993) も *jealousy* と *envy* は概念的にも経験的にも混同した意味合いが存在していることを指摘し、用語の区別を心理学的に区別する研究を行った。その結果、*envy* は自分にとって重要である領域 (例えば、才能、業績、所有物など) に関して、他者との比較において劣っているときに生じる感情であり、その感情には劣等感、熱望、憤慨、悪意等、いくつかの感情要素が含まれることを指摘している。一方、*jealousy* は、人との関係の中で生じるという特徴をもち、例えば他者をライバル視することによって、自分が他者よりも劣っていることから生じる感情、すなわち損失の恐れや、裏切りについての疑いや怒りなどが含まれるという。*jealousy* について同様の定義は Izard (1996) や Salovey and Rodin (1984) においてもみられる。Salovey & Rodin (1984) は、社会的比較ジェラシーという用語を用い、この定義について「関係をもつ他者との比較から生じる感情」と意味づけている。自分が関心を寄せる領域で自分と似た他者が少しでも優位な場合に最も強く社会的比較ジェラシーが経験され、友達関係を築く気持ちが最も低くなるという実験結果を示している。

このような意味的な違いが存在するのであるが、以上の概観から共通することは、多くの研究者が指摘するように、妬みは「複合的(compound)」「混成された(blended)」「複雑(complex)」といった表現でとらえているように多くの感情要素から成り立っているということである。Izard (1996) は、*jealousy* には「恐怖」と「怒り」という基本的感情が含まれているとしている。Smith and Parrott (1988) は、*envy* が「劣等感 (inferiority)」「不満足感 (dissatisfaction)」「罪悪感 (self-criticism)」「発展への動機 (motivation to improve)」といった要素を含むことを、一方、*jealousy* は「疑惑(suspiciousness)」「拒否(rejection)」「敵意(hostility)」「喪失への恐れ(fear of loss)」「傷つき(hurt)」などの要素を含むものととらえている。一般的に妬み感情はその多くがネガティブなものであるが、中には「発展への動機」といったポジティブなものも含まれている。これらの見解を参照して、妬み感情とは「自分と似た他者が優位な場合に抱く、親近と嫌忌を伴う両価的感情である。それゆえに、さまざまな感情が混在する複合的感情であり、主観的認知は困難である。」と定義することとした。

津江・馬場園(2003)の大学生への妬み経験回顧調査では、KJ法による分類を行った結果、妬み感情を構成する要素として「羨望」「敵意」「不公平感」「相手への期待」「自責」「疑問」「不快感」「将来への希望」「合理化」「相手に感心」「無関心」「開き直り」「無力感」といった下位カテゴリが見出された。この分類の結果、妬み感情にはネガティブな感情が多い中でも、「将来への希望」「相手に感心する」などポジティブな感情も含まれることが示された。この調査をもとに、津江・馬場園(2003)は下位カテゴリ20項目を選定し、中学生を対象にした質問紙を作成した。自覚し難い妬み感情を測定することになるので、妬み感情を引き起こしやすい領域の異なる3つの仮想場面を想定

して、それぞれの場面での妬み感情について 20 項目の質問項目を用いて 4 件法での評定を求めた。因子分析の結果、妬み感情にはネガティブな因子のみならず、自分を向上させようとするポジティブな因子も含まれることが明らかになった。因子分析の結果を Table1 に示す。この表から、第 1 因子を「抑うつ感」因子、第 2 因子を「対抗心」因子、第 3 因子を「向上心」因子、第 4 因子を「不公平感」因子、第 5 因子を「無力感」因子と命名した。

Table1 妬み感情の因子分析（中学生）

項目の内容	因子負荷量					h ²
	I	II	III	IV	V	
13. くよくよ、考え込んでしまう	.89					.69
19. なんとなく、さびしい	.86					.68
7. もう、どうしようもないんだ	.75					.59
8. だれも、私のことをわかってくれない	.71					.60
6. つらくてたまらない	.70					.72
12. 私のいる場所がなくなってしまふ	.67					.66
20. 私のことを、わかってほしい	.59					.54
16. 自分のことが、はずかしい気がする	.52					.53
18. どうして、こんなことになったんだろう	.51					.56
2. こんなことになって、くやしい		.77				.62
10. この人にだけは、負けたくない		.64				.46
9. 考えただけで、むしゃくしゃする		.53				.64
1. この人の顔も、見たくない		.46				.65
15. 私も、この人のようにになりたい			.63			.51
5. 私は私で、がんばりたい			.62			.39
17. この人は私より、よくできるのだ			.52			.51
3. この人が成功したのは、私が力をかしたから				.62		.50
4. この人ばかりで、ずるいと思う				.60		.55
11. この人のことは、信じられない					.69	.38
14. こんなこと、どうでもいい					.47	.70
因子負荷量の 2 乗和	8.06	1.38	1.02	0.59	0.40	11.45
(寄与率 %)	40.30	6.89	5.10	2.97	1.98	57.24
Alpha	.92	.80	.65	.66	.48	

注) 因子負荷量は .45以上を記載した。5因子指定、プロマックス回転後

2. 妬みへの対処行動

妬み感情が生じると、その感情に対処する行動が引き起こされる事態が想定される。妬み感情を発生させるような場面は中学校生活には日常茶飯事であると考えられる。妬み感情は複合的なものであるために、ネガティブな面とポジティブな面が混在した両価的感情に戸惑うとともに、その対処に苦しむものと考えられる。それでは妬みに対する対処行動としてどのようなものがあげられるのであろうか。Silver and Sabini(1978)は、対象となった相手を貶めるといったネガティブな対処行動を、Smith and Parrott(1999)は、妬みを多く経験しているとされる被験者の方が、ポジティブな対処行動をとるといった結果を報告している。Salovey and Rodin(1988)は「自己信頼」「自己補強」「選択的無視」という 3つの対処方略を挙げている。Vecchio (1997)は、「破壊的-建設的」「他者に関わる一関わらない」という 2次元が存在することを明らかにしている。

最近の研究で澤田・新井(2002)の小学生と中学生を対象とした調査では、妬み対処方略には「破壊的関与」「意図的回避」「建設的解決」という 3因子が存在することを見出している。津江・馬場園(2003)の大学生への妬み経験回顧調査では、妬みを生じさせた相手と関わるか否か、それは一方的か双方向か等の対人的な対処行動に基づいた分類を行ったところ、「変化なし」「回避」「服従」「学習」「主張」「対立」「報復」「和解」「感情表出」「努力」「第三者の介入」という 11 の下位カテゴリに分類することができた。本研究では、得られた 11 の下位カテゴリにもとづいて、3つの仮想妬み場面での登場人物の具体的な対処行動を測定する質問項目を 12 項目作成し、中学生に対して調査したデータを因子分析することにより、妬みへの対処行動にどのような因子が含まれるのかを明らかにする。

3. 妬みと対人態度

妬みは対象となる相手がいて抱く感情であるから、他者と自分との関係をどのようなものとして捉えているかという対人態度が大きく影響すると考えられる。対人態度を測定する尺度として、戸田(1988)の内的作業モデル尺度がある。この尺度は Bowlby の愛着理論に対応した安定 (Secure)、回避 (Avoidant)、両価 (Ambivalent) という

3つの下位尺度からなる。安定群に属する個人は「他者は応答的で、自己は援助される価値のある存在」という表象を、回避群に属する個人は「他者は否定的で、援助を期待できないため、これを補完するため自己充足的な存在」という自己への表象を、両価群に属する個人は「他者に対し、アンビバレント(両価)な表象をもち、自己不全感が強い」という特徴がある。内的作業モデルは乳幼児期における母子関係が基盤となって形成される対人関係が、その後の発達に影響を及ぼすことを重視しており、自我発達、ソーシャルスキル、ソーシャルサポートなど様々な心理変数との関連が明らかにされてきた。しかしながら、妬みと内的作業モデルとの関連を調べた研究はいまだ見られない。妬みも対人関係の中で発生する現象であるので、内的作業モデルの3つの下位尺度が妬み感情や妬み行動を構成する下位因子とどのように関連しているのかを調べることは重要である。本研究では内的作業モデルで見出された「安定」「回避」「両価」の3因子と妬み感情・妬み行動との関連を明らかにし、津江・馬場園(2003)で作成した妬み感情尺度と本研究で作成する妬み行動尺度の構成概念的妥当性を探る。

4. 妬みと自尊心

自尊心 (self-esteem; 自尊心, 自己価値とも呼ばれる)とは、人が自分自身についてどのように感じるかという感じ方のことであり、自分の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことであると定義される(山本・松井・山成, 1982)。この自尊心の高さが妬み感情に関与していることを示す研究が多く報告されている。

妬み感情のネガティブな対処行動として、まず相手への攻撃を挙げることができよう。土居(1998)は子どもの問題行動、特にいじめには相手への妬み感情が関係している可能性を指摘している。妬み感情は他者の優越を見たときに生じるのであるから、そこには自尊心低下の影響があると考えられる。Sarnoff and Zimbardo(1961)は、自尊心の低下を防止するために、他者から孤立し、比較を止めることを示している。繰り返し成績の悪いことを知らされたり、過度の不安を呼び起こす情緒的体験をすると、他者との比較を行わなくなったり、親和的行動が減少する傾向があるという。

Latané(1966)は、自己価値を高揚させるか、防衛させるかによって、比較を行う相手が違うことを示している。自己価値高揚を目的とした比較は上位他者との比較で行われ、自己と上位他者との間で同一化がなされる(上方比較)。Wheeler(1966)によると、上位他者との比較は、向上の動機づけが高い時に行われやすい。高田・高田(1976)によると、上位他者との比較は、自分が良い成績を取ったときなど、自尊心が高い状態を自覚している時に行われやすいとしている。

一方、Latané(1966)は、比較が自己価値を防衛することを目的としている場合には、下位他者が選択されるとしている(下方比較)。Friend and Gilbert (1973)は、自尊心が脅かされやすい状況や個人がこのような下方比較を行うことを明らかにしている。狩野(1980)も、自尊感情への脅威が強い状況において、比較の対象として下位他者が多く選択されるとしている。Wills(1981)も、自分よりも不運な他者と比較を行うことで、人は主観的幸福感を増すことができるとしている。下方比較は自分の幸福感を感じられないとき、とくに自尊心が脅威にさらされている場合に起こりがちであるとしている。さらに、現状が自分よりも不運な他者と比較するという受動的な下方比較だけでなく、他者を傷つけたり、中傷したりして自分より惨めな状態にした上で比較を行い、自分の主観的幸福感を高めるという能動的な形態も存在するとしている。

さらに自尊心が高い方が妬みに影響を及ぼすという研究もある。Dion and Dion(1975)は自尊心の高いの方が頻繁に嫉妬の経験をするを報告している。Amstutz(1982)も自尊心の高いの方が病的嫉妬を抱きやすく、より混乱や不安、罰する気持ちが大きいことを指摘している。Oweus(1993)はいじめ研究の中で、自尊心が高いの方が暴力的手段に訴えることを好み、衝動的で相手に優越したい欲求が強いとしている。

以上の先行研究を参考にすると、自尊心の高低は妬み感情や妬み行動にネガティブな影響とポジティブな影響を及ぼしており、研究結果が必ずしも一致しているものではない。その原因は、1つは第三者の観察による調査や本人の自己報告など、研究方法に一貫性がみられないからであり、2つめは妬み感情や妬み行動は複合的な要素から

なるものであるために、その要素が示されていないからである。本研究では、妬み感情と妬み行動を構成する因子を明らかにした上で、これらの因子に自尊心がどのような影響を及ぼすのかを探ることにした。自尊心の測定に Rosenberg(1965)の Self-esteem 尺度を山本ら(1982)が邦訳したものをを用いた。

方 法

1. 調査対象者：高知市内の公立中学校3年生 70名（男 33名，女 37名）

2. 調査課題

(1) 妬み感情と妬み行動の測定

① 妬み感情と妬み行動課題

自覚し難く、第三者の観察が有効であることが妬み感情の特徴であることから、妬みを発生しやすいと考えられる場面（仮想妬み場面）を設定して、登場人物の感情を推測し、その対処行動を評定させる質問紙を作成した。仮想妬み場面を設定したのは、登場人物の示す文脈に回答者の実生活での妬み感情や行動が投影されると考えたからである。

妬み感情と妬み行動を調べるために、3つの領域からなる仮想妬み場面を設定した。1つめの領域は、友人 X が容姿、学業、本人の得意分野といった「資質」で優越していることを表現した。2つめの領域は友人 Y が家庭の条件で恵まれているといった「環境」で、3つめの領域は賞賛、信頼や注目といった「他者の態度」で、優越していることを表現した。これらの領域で妬み感情を引き起こすと想定される具体的内容は、Table2 に示す通りである。内容に示されたストーリーの図式は、中学生 O 男（O 子）には友人 X がいると仮定して、友人 X の優越を示すという形式をとった。

Table2 質問紙に使用した妬み感情を引き起こす内容

優越	内容
資質	友だちX男は、顔やスタイルがよい。 友だちX男は、勉強やスポーツがよくできる。 友だちX男は、O男の得意なことをもっと上手にできる。(自我関与強調)
環境	友だちY男の家は、お金持ちである。 友だちY男の親は、ものわかりが良い。 友だちY男は、環境に恵まれていて、いろんな経験をしている。(自我関与強調)
他者の態度	友だちZ男は、先生からほめられることが多い。 友だちZ男は、友だちの間で、しんらいされている。 友だちZ男がすることは、なにかと注目を集める。(自我関与強調)

② 妬み感情を調べる質問紙

Table3 に示すように妬み感情に関する質問紙は、津江・馬場園(2003)で得られた妬み感情 5 因子から 12 項目を選択した。すなわち、抑うつ感因子から「もうどうしようもないんだ」「くよくよと、考えこむ」「誰も自分のことをわかってくれない」「なんとなくさびしい」の 4 項目、対抗心因子から「X 男にだけは負けたくない」「このことを考えただけでも、むしゃくしゃする」「こんなことになって、くやしい」の 3 項目、向上心因子から「自分は自分でがんばりたい」「自分も、X 男のようにになりたい」「X 男は、自分よりよくできるのだ」の 3 項目、不公平感因子から「X 男ばかりでずるいと思う」の 1 項目、無力感因子から「X 男のことは信じられない」の 1 項目であった。今回の調査では、3 領域の課題で被験者の防衛的な反応を避けるため、「妬み」という言葉は用いず、架空の中学生 O 男（O 子）の「気持ち」について、12 の妬み感情項目にどの程度あてはまるかを、4 段階評定（「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）で回答を求めた。

③ 妬み行動を調べる質問紙

妬み行動に関する質問紙は、津江・馬場園(2003)で得られたカテゴリから、「気持ちの隠蔽」「無視」「第三者関与」

「自己発展」「模倣」「同一化への努力」「間接攻撃」「変化なし」「直接攻撃」「落ち込み」「自分なりの行動」「取り入れ」に基づいて Table3 に示す 12 項目を作成した(Table3)。調査対象者の性と架空の中学生 O 男 (O 子) の性は、一致させた。これら 12 項目について、4 段階評定（「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）により回答を求めた。

Table3 質問紙に使用した妬み感情と行動

*主人公O男の気持ち(感情)	
1. もう、どうしようもないんだ。	
2. X男だけには、負けたくない。	
3. 自分は自分で、がんばりたい。	
4. X男ばかりで、ずるいと思う。	
5. このことを考えただけでも、むしやくしゃする。	
6. 自分も、X男のようにになりたい。	
7. こんなことになって、くやしい。	
8. くよくよと、考えこむ。	
9. だれも、自分のことはわかってくれない。	
10. なんとなくさびしい。	
11. X男のことは、信じられない。	
12. X男は、自分よりよくできるのだ。	
*主人公O男の行動	
1. X男には、自分の気持ちがばれないようにする。(気持ちの隠蔽)	
2. X男とは、かかわらないようにする。(無視)	
3. 他の友だちに、X男のことをどう思うか、聞いてみる。(第三者関与)	
4. 自分のよいところを、伸ばすようにする。(自己発展)	
5. X男に近づいて、よさをまねようとする。(模倣)	
6. 自分も、X男のようになるため、努力する。(同一化への努力)	
7. X男に、なんとなくつめたくあたる。(間接攻撃)	
8. X男が、困るようなことをする。(直接攻撃)	
9. 自分は何をしてもだめなのだと、おちこむ。(落ち込み)	
10. 今までどおりに、X男とつき合う。(変化なし)	
11. 自分なりにできることをさがして、取り組んでみる。(自分なりの行動)	
12. X男に、どうすればうまくできるかを聞いてみる。(取り入れ)	

(2)自尊心の測定

自尊心の測定には、Rosenberg(1965)の作成した Self-esteem 尺度の山本ら(1982)の邦訳版を使用した。この尺度は「少なくとも人並みには価値のある人間である」「いろいろな良い素質をもっている」「だいたいにおいて自分に満足している」など 10 項目からなり、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度を調べることができる。これら 10 項目を 4 段階評定（「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）により回答を求めた。

(3)対人態度の測定

戸田(1988)の内的作業モデル尺度 18 項目を用いて、対人態度を測定した。この尺度は、安定 (Secure)、回避 (Avoidant)、両価 (Ambivalent) という 3 つの下位尺度からなる。各尺度の質問項目を例示すると、安定尺度は「私は知り合いができてやすい方だ」「私はすぐに人と親しくなる方だ」などの 6 項目からなり、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という自己に関する内容を問うている。回避尺度は「人に頼るのは好きでない」「私は人に頼らなくても、自分 1 人で充分にうまくやっていけると思う」などの 6 項目からなり、他者は拒否的で援助が期待できないことからこれを補完するために極めて自己充足的な存在という自己に関する内容を問うている。両価尺度は「人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」「自分を信用できないことがよくある」などの 6 項目からなり、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象をもち、自己不全感の強さを問うている。これら 18 項目を 4 段階評定（「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」）により回答を求めた。

3. 手続き

調査課題の内容を含んだ冊子 (A4 版で 6 ページからなる) を作成した。内容構成は、1 ページ目には例題を設け、2 ページから 4 ページは妬み感情と妬み行動の質問紙を、5 ページと 6 ページには対人態度尺度と自尊感情尺度を載

せた。調査の実施については、学級担任に依頼した。ホームルームの時間に実施し、調査に要した時間は約 25 分であった。

結 果

回答に不備のあった者を除き、最終的な調査対象者は 61 名（男 27 名，女 34 名）となった。

1. 妬み感情尺度の因子分析

妬み感情尺度の因子については、津江・馬場園（2003）で見出した 5 因子をそのまま利用することにした。その内訳は「抑うつ因子」「対抗因子」「向上心因子」「不公平感因子」「無力感因子」であり、Table3 に示す質問項目に対応させた。

2. 妬み行動尺度の因子分析

質問紙として用いた 12 項目は、「資質」「環境」「第三者の態度」の 3 領域での得点を合計したデータをもとにして主因子法による因子分析を行った。「第三者関与」「変化なし」の 2 項目は、複数の因子間で負荷量が高かったため不良項目として削除し、10 項目について再度、主因子法による因子分析を行った。第 3 因子と第 4 因子の固有値は 1 以下の数値を示したが、4 因子解が解釈しやすいものにとらえた。そこでこれら 4 因子を軸にしてプロマックス回転を行った。その結果を示したのが Table4 である。

各因子を代表する項目の因子負荷量は 0.45 以上とした。各因子における項目間の内的整合性を調べるために α 係数を求めたところ、第 4 因子はやや低い傾向にあるものの、全因子で妥当な値が得られた。各因子の解釈を試みると、第 1 因子は、「直接攻撃」「間接攻撃」「無視」の 3 項目で因子負荷量が高かった。これらの項目は、妬みを感じた相手に対して、何らかの形で攻撃を加え、ダメージを与えようとする行動にとらえ、「拒否」因子と命名された。

第 2 因子は、「自己発展」「自分なりの行動」の 2 項目で因子負荷量が高かった。これらの項目は、妬みを感じた時にも、相手の優越という現実から自己の可能性を広げる行動をとるととらえ、「挑戦」因子と命名された。

第 3 因子は、「同一化への努力」「模倣」「取り入れ」の 3 項目で因子負荷量が高かった。これらの項目は、妬みを感じた相手のようになることを目標とする行動にとらえ、「接近」因子と命名された。

第 4 因子は、「気持ちの隠蔽」「落ち込み」の 2 項目で因子負荷量が高かった。これらの項目は、妬みを感じた相手と接触することを避け、自分の殻に閉じこもる行動にとらえ、「閉塞」因子と命名された。

Table4 妬み行動の因子分析(中学生)

項目の内容	因子負荷量				h ²
	I	II	III	IV	
9. 彼が、困るようなことをする	.91				.86
7. 彼に、なんとなくつめたくあたる	.92				.76
2. 彼とは、かわらないようにする	.82				.72
4. 自分の良いところを、伸ばすようにする		.90			.81
11. 自分なりにできることをさがして、取り組んでみる		.87			.78
6. 自分も、彼のようにするため、努力する			.81		.71
5. 彼に近づいて、良さをまねようとする			.68		.53
12. 彼に、どうすればうまくできるかを聞いてみる			.54		.60
1. 彼には、自分の気持ちがばれないようにする				.74	.55
10. 自分は何をしてもだめなのだ、おちこむ				.47	.67
因子負荷量の2乗和	3.18	2.46	0.98	0.34	6.96
(寄与率%)	34.31	27.99	12.61	7.21	82.11
Alpha	.90	.83	.75	.65	

注) 因子負荷量は .45以上を記載した。4因子指定、プロマックス回転後

3. 自尊心と対人態度並びに妬みとの関連

(1) 尺度間の相関行列

先行研究により自尊心尺度は1因子構造であり(山本・松井・山成, 1982), 内的作業モデル(対人態度)尺度は3因子構造である(戸田, 1988)ことが判明しているため, 本研究ではこれらの因子をそのまま使用した。したがって自尊心尺度における自尊心因子には質問紙で用いられた10項目が, 対人態度尺度は3因子にそれぞれ5項目ずつが含まれることになるので, これらの因子に含まれる項目の平均点を求めた。妬み感情尺度は前述したように津江・馬場園(1993)で見出した5因子を, 一方, 妬み行動尺度は本研究で見出した4因子を用いた。これら全尺度における因子間の相関行列はTable5に示すとおりである。

Table5 自尊心・内的作業モデル尺度と妬み感情・行動、各因子の相関(N=61)

	自尊心	対人態度			妬み感情					妬み行動			
		安定	両価	回避	抑うつ	対抗	向上	不公平	不信感	拒否	挑戦	接近	閉塞
自尊心	1												
対人態度 安定	0.662**	1											
対人態度 両価	0.556**	-0.156	1										
対人態度 回避	-0.271*	-0.074	0.340**	1									
妬み感情 抑うつ	-0.400**	-0.134	0.609**	0.381**	1								
妬み感情 対抗	0.105	0.218	0.306*	0.161	0.493**	1							
妬み感情 向上	-0.157	0.097	0.260*	0.114	0.211	0.120	1						
妬み感情 不公平	-0.114	0.036	0.454**	0.365**	0.605**	0.633**	0.292*	1					
妬み感情 不信感	-0.170	0.006	0.385**	0.436**	0.583**	0.467**	-0.142	0.534**	1				
妬み行動 拒否	-0.248	-0.029	0.475**	0.493**	0.603**	0.497**	-0.081	0.586**	0.800**	1			
妬み行動 挑戦	0.233	0.331**	-0.160	-0.136	-0.302*	-0.042	0.403**	-0.207	-0.236	-0.264*	1		
妬み行動 接近	0.063	0.194	-0.006	-0.062	0.096	0.249	0.599**	0.080	-0.104	-0.085	0.444**	1	
妬み行動 閉塞	-0.312**	-0.035	0.555**	0.325**	0.705**	0.470**	0.321*	0.559**	0.413**	0.432**	-0.218	0.229	1

注) ** p<.01, * p<.05

(2) 妬み感情と妬み行動との関連

妬み感情が発生することによって, その対処行動としての妬み行動が引き起こされるという関係が成り立つ。そこで感情を原因, 行動をその結果ととらえ, 妬み感情5因子が妬み行動4因子にどのような影響を及ぼすのかについて, 感情から行動へのパスを想定して分析を行なった。分析に用いたソフトはAMOS 18(SPSS社製)である。結果はFig.1に示すとおりである。

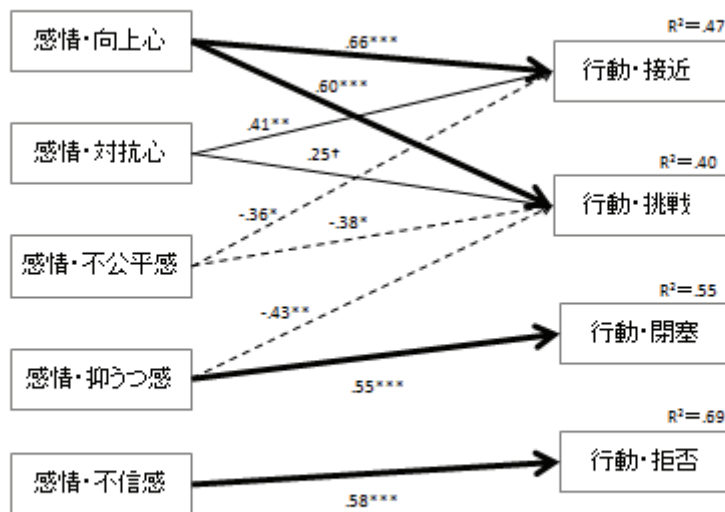


Figure1 妬み感情と行動のパス・ダイアグラム

Fig.1には有意な関連がみられたパスのみを示してある。パス上に示してある数値は標準偏回帰係数(β)であり、妬み行動の各因子（内生変数）に示してある数値は説明率(R^2)である。内生変数での誤差変数については省略した。なお、図に示してある実線は正のパス、破線は負のパスを、太線は 0.1%(***)、中太線は 1%(**)、細線は 5%(*)、極細線は 10%(+)レベルでの有意水準を表している。

ポジティブな感情因子と考えられる「向上」「対抗」、ネガティブな感情因子と考えられる「不公平」「抑うつ」「不信感」に分けて、結果を示す。

感情因子「向上」は、行動因子「接近」($\beta = 0.66$, $p < .001$)と、「挑戦」($\beta = 0.60$, $p < .001$)に正の強い影響を及ぼしていた。感情因子「対抗」は、行動因子「接近」に正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.41$, $p < .01$)。また、行動因子「挑戦」に正の有意傾向を示した($\beta = 0.25$, $p < .10$)。

感情因子「不公平」は、行動因子「接近」($\beta = -0.36$, $p < .05$)と、「挑戦」($\beta = 0.38$, $p < .05$)に負の影響を及ぼしていた。感情因子「抑うつ」は、行動因子「挑戦」に負の影響を及ぼしていた($\beta = -0.43$, $p < .01$)。また、行動因子「閉塞」に強い正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.55$, $p < .001$)。感情因子「不信感」は、行動因子「拒否」に強い影響を及ぼしていた($\beta = 0.58$, $p < .001$)。

モデル適合度については、 $\chi^2 = 5.327$, $df = 6$, GFI は .983, AGFI は .870, RMSEA は .103, AIC は 83.32 となり、あてはまりのよいモデルが得られた。

(3) 自尊心と妬み感情・妬み行動との関連

自尊心は対人関係に影響を及ぼす中核的な個人的特性であると考え、この特性が妬み感情や妬み行動にそれぞれどのような影響を及ぼしているのかを分析する。ここでは自尊心 1 因子を外生変数、妬み感情 5 因子と妬み行動 4 因子をそれぞれ内生変数とみなし、Fig.2 に示すモデルを作成し、自尊心が妬み感情と妬み行動への影響度を調べるためにパス解析を行った。

その結果、妬み感情因子との関連で有意なパスが得られたのは 5 因子のうちの「抑うつ」のみであり、負の強い影響を及ぼしていた($\beta = -0.40$, $p < .001$)。一方、自尊心と妬み行動因子との関連については、「挑戦」に正の有意傾向が見られ($\beta = 0.23$, $p < .10$)、「閉塞」($\beta = -0.31$, $p < .05$)と「拒否」($\beta = -0.25$, $p < .05$)には負の影響を及ぼしていた。

モデル適合度については、 $\chi^2 = 184.781$, $df = 26$, GFI は .676, AGFI は .314, RMSEA は .319, AIC は 242.781 であった。GFI, AGFI が低いので、あてはまりはあまりよいとはいえない。

(4) 対人態度と妬み感情、妬み行動との関連

自尊心と同様に、愛着理論に基づく対人態度尺度（内的作業モデル尺度）も妬み感情や妬み行動に影響を及ぼす重要な特性である。そこで対人態度尺度の 3 因子を外生変数、妬み感情 5 因子と妬み行動 4 因子を内生変数とみなし、Fig.3 に示すモデルを作成し、対人態度が妬み感情と妬み行動への影響度を調べるためにパス解析を行った。以下、対人態度の 3 因子が妬み感情 5 因子ならびに妬み行動 4 因子に有意な影響を及ぼしているパスについての結果を示す。

対人態度「安定」因子は、妬み感情「対抗」因子($\beta = 0.27$, $p < .05$)と、妬み行動「挑戦」因子($\beta = 0.31$, $p < .05$)に正の影響を及ぼしていた。

対人態度「両価」因子は、妬み感情 5 因子全てと正の関連が見られた。最も強い影響が見られたのは、「抑うつ」因子であった($\beta = 0.57$, $p < .001$)。続いて「不公平」因子($\beta = 0.39$, $p < .01$)、「対抗」因子($\beta = 0.32$, $p < .01$)、「不信感」因子($\beta = 0.28$, $p < .01$)、「向上」因子($\beta = 0.27$, $p < .01$)の順で強い正の影響を及ぼしていることがわかった。対人態度「両価」因子は、妬み行動「閉塞」因子に強い正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.51$, $p < .001$)。また「拒否」因子にも正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.36$, $p < .01$)。

対人態度「回避」因子は、妬み感情「不公平」因子に正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.28$, $p < .05$)。「不信感」因子

($\beta = 0.23, p < .10$)と「抑うつ」因子($\beta = 0.20, p < .10$)には正の有意傾向が見られた。対人態度「回避」因子は、妬み行動因子「拒否」に強い正の影響を及ぼしていた($\beta = 0.38, p < .001$)。

モデルの適合度については、 $\chi^2 = 129.594, df = 34$, GFI は.796, AGFI は.532, RMSEA は.216, AIC は 217.594, であった。GFI と AGFI が低いのであてはまりはあまりよいとはいえない。

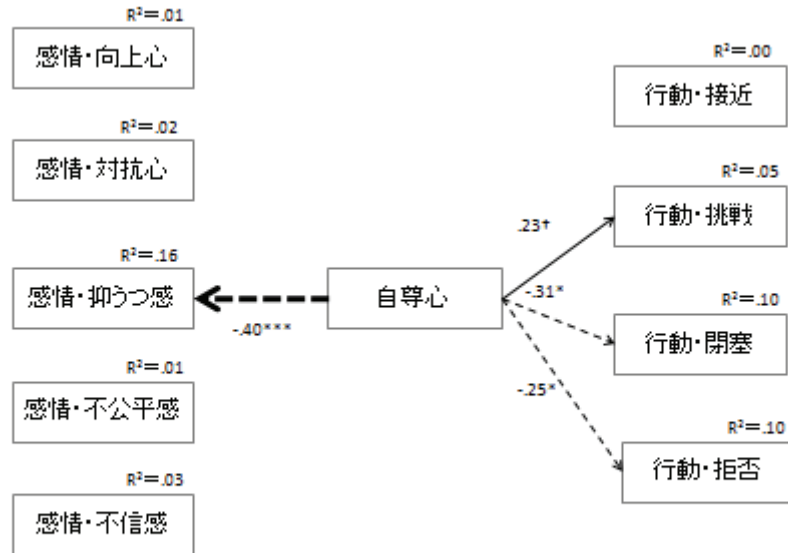


Figure2 自尊心と妬みのパス・ダイアグラム

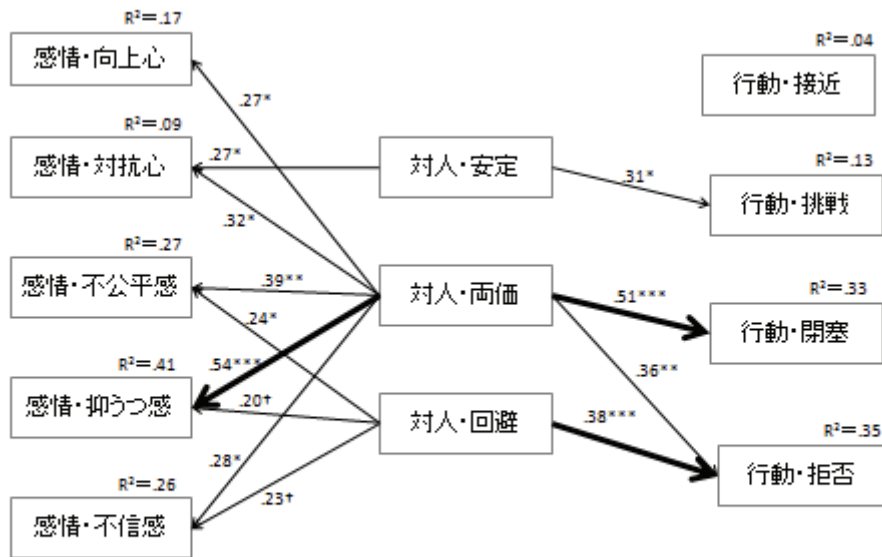


Figure3 対人態度と妬みパス・ダイアグラム

考 察

1. 妬み行動（対処行動）の因子分析

第1因子となったのは、「拒否」因子であった。妬みを感じた相手に対して、直接的・間接的に攻撃し、かつ関わりを避けようとする項目でまとまりが強かった。この因子は、妬みを感じた場面で友人関係を築く上ではネガティブな対処行動といえよう。

第2因子となったのは、「挑戦」因子であった。妬みを感じた場面であっても、自分なりに自分の課題となることに取り組んでいこうとするもので、ポジティブな対処行動といえよう。ここには、相手との関わりについての記述が含まれないことも特徴的で、相手からは独立した自分を意識した対処行動ととらえることができる。

第3因子となったのは、「接近」因子であった。妬みを感じた場面で努力を続けるという意味では、第2因子と同じくポジティブな対処行動と考えられる。妬みを感じた相手を意識している点が、「挑戦」と「接近」では対照的である。

第4因子となったのは、「閉塞」因子であった。相手に自分の気持ちを隠蔽し、閉じこもってしまうというもので、社会的に不適応状態に陥っていると考えられる。対処行動としては、ネガティブであると判断されよう。

「第三者関与」「変化なし」は不良項目となった。「変化なし」のカテゴリは、津江・馬場園(2002)の大学生を対象とした経験回顧調査では最も度数が多かった。「第三者関与」も、同じ調査で得られたカテゴリであり、White and Mullen (1989)の嫉妬への対処戦略の9因子の中にも、第9因子「社会的援助探索」として登場している。また、Folkman and Lazarus(1988)が挙げた8つのコーピング方略にも他者から何らかの援助を求める「サポート希求」が含まれている。これら2項目は対処行動として重要であるが、本研究で因子として特定されなかったため、今後、質問項目のさらなる精選が必要となる。

2. 妬み感情が対処行動へ及ぼす影響

パス解析の結果は、ネガティブな感情がネガティブな行動へ正の影響を、ポジティブな行動へ負の影響を示すものであった。これらの関連について内訳を見てみると、「抑うつ感」は「閉塞」行動に対して正の強い影響を、「挑戦」行動に対して負の強い影響を示した。この結果から妬みが喚起される場面で抑うつ感情を抱くと、他者との関わりを断つ行動に向かいがちで、自分から行動しようという積極性が失われることが示唆される。

「不公平感」は、「接近」行動と「挑戦」行動に対して負の影響を示した。妬みが喚起される場面で「ずるい」といった感情にとらわれると、相手に近づこうという気が失せてしまったり、自分にできることもする気がなくなってしまうことが示唆される。

「不信感」は、「拒否」行動に対して正の強い影響を示した。妬みが喚起される場面で相手を信じられなくなることは、相手を拒否する行動に向かうことが示唆される。

「向上心」というポジティブな感情からは、「接近」行動や「挑戦」行動といったポジティブな行動に正の強い影響を示した。「接近」行動は相手に近づき良さを学ぼうとすること、「挑戦」行動は、自分の良さを意識してそれを伸ばそうとすることである。どちらも、高度で望ましいポジティブな対処行動であり、問題となるような行動ではない。妬みを喚起される場面でも、妬み感情に対峙し、適正な判断をして相手の良さを学ぼうという健康な対処行動が存在することが明らかとなった。

「対抗心」も「向上心」と同じように、「接近」行動や「挑戦」行動といったポジティブな行動に正の影響を示した。「向上心」の質問項目の記述には「負けたくない」「むしろくしゃくしゃする」「くやしい」といった強い感情語が含まれている。妬みを喚起される場面で、自分の怒りや敵意のようなネガティブな感情を意識していることがわかる。ところが、そのような強い感情を意識している個人は、むしろ「接近」「挑戦」といったポジティブな行動に向かうことが示唆された。ネガティブととらえられがちな相手への怒りや敵意をしっかりと自覚できる方が、行動として

は良い方向に進む可能性が明らかになった。このことは、Smith and Parrott(1999)らの「妬みを多く経験している」とされる被験者の方が、ポジティブな対処行動をとる」という結果とも一致するものである。

本研究では、相手への攻撃に相当する「拒否」行動は、怒りや敵意よりむしろ不信感が影響していることが明らかとなった。「不信感」といった漠然としたネガティブな気持ちはより危険な行動に結びつくことや、相手への敵意とも受け止められる「対抗心」とポジティブな対処行動と関連させて考察すると、ある意味、素直に怒りをもっての方がよりよい対処行動に近づけることになる。今後、ネガティブな感情をいかに受容するかということが中学生の発達上の課題として重視していく必要がある。

3. 自尊心が妬み感情と対処行動へ及ぼす影響

自尊心は、妬み感情因子との関連では、「抑うつ」にのみ負の影響を及ぼしていた。この結果は、自尊心が低い者ほど、抑うつ傾向が高く、逆に自尊心が高い者ほど抑うつ傾向が低いことを示している。自尊心との関連が多くみられたのは妬み行動因子であった。感情因子とは対照的に、自尊心は4つの対処行動因子のうち「拒否」「挑戦」「閉塞」という3つの因子に影響を及ぼしている。特に「拒否」と「閉塞」因子には負の影響を、「挑戦」因子には正の影響を及ぼしていることが注目される。「拒否」と「閉塞」の2因子は、妬みへの対処行動の中ではネガティブな特性をもつものである。この結果は自尊心が低い者ほど「拒否」行動や「閉塞」行動といった好ましくない対処行動をとる傾向が強いことを示している。一方、自尊心の高い者は、妬みが喚起される場面では「挑戦」といったポジティブな対処行動がとれるということになる。Lieberman, DeRisi and Mueser (1992)のストレス-脆弱性-対処モデルの理論では、主体にとって問題が発生する場面でより良い対処行動を知っていることが、相手からの良い反応を招き、そのことで主体がもつ外界への認知も自尊心も向上するとしている。自尊心の高い者ほど挑戦的行動も高いという今回得られた結果は、この理論と一致すると考えられる。

上述したように、自尊心は「挑戦」と正の関連を示したが、「拒否」とは負の関連を示した。これらの行動はどちらも積極性のある行動であるが、その積極性を何に向けるかという対象が異なっている。自尊心が「拒否」行動へ負の影響をもつということは、自尊心が低いと自分がとるべき行動よりも相手への憎しみが生じることが考えられる。一方、「挑戦」行動へ正の影響をもつことは、自尊心が高いと相手への憎しみが生じることなく自分の課題に取り組もうとすることが考えられる。妬みという不快な感情によって生じたエネルギーを相手に向けるのか、自己の課題に向けるのか、その対象によって自尊心の影響が全く逆であることが明らかになった。これまでの多くの先行研究では、ネガティブな妬み対処行動や攻撃的行動と自尊心との関連が一貫したものでなかったのは、対象まで想定されていなかったことが原因しているのかもしれない。今後、積極性に向ける対象やその動機が何であるかといった質的な検討が必要であることが示唆された。本研究で得られた自尊心と妬み感情・妬み行動のパス図から、「自尊心の高い個人は、妬み感情が喚起されたとしても思い悩んだり、妬みによって落ち込んだりすることはない傾向にある。自尊心が高くても複雑な感情は経験するが、自分が目標とすべき行動に向かう対処行動につながり、相手への憎しみにつながりにくい」と結論づけることができよう。

4. 対人態度が妬み感情と対処行動へ及ぼす影響

対人態度尺度は「安定」「回避」「両価」の3因子からなる。Fig.3からも明らかなように、妬み感情5因子とは多くの有意な正の関連がみられ、とくに「両価」因子が顕著であった。これは、対人態度の「両価」傾向が高い者ほど妬み感情が生じやすいという Klein らの理論と合致する。また、このような特徴がみられたことは、本研究で明らかにした妬み感情尺度の妥当性の評価にもつながる結果である。

「両価」因子と最も強い影響が見られた妬み感情因子は、「抑うつ感」であった。このことから、両価的な対人態度が強い者は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象をもっているために、不信な表象が優位であると、他者に対する不信に鬱々と思悩んだり、自分に対する不全感を強め、抑うつ傾向を高めるという特徴があるといえる。

その一方で、「向上心」や「対抗心」といった感情とも関連しているところから、信頼の表象が優位であると、他者に対してポジティブな妬み感情をもつことができるのである。このように両面的な対人態度が強い者は、このようなポジティブな感情とネガティブな感情を統合できていないため、対処行動レベルで見たとき、その影響は「閉塞」「拒否」といったネガティブな因子に限定されてしまっている。したがってアンビバレントな対人態度を統合するためには、教育的配慮や望ましい環境を与えることによってポジティブな感情を高め、「接近」「挑戦」といったポジティブな行動を学習させることが必要であろう。本研究で得られたパス図から、対人態度の「両価」因子と妬み尺度との関連をまとめると、「相手に対して両面的な対人態度をもちがちな個人は、妬み感情が喚起される場面では抑うつ感を中心に、多様でアンビバレントな感情を経験している。ネガティブな感情だけではなくポジティブな感情も経験しているが、いざ行動という場面になると、自分の殻に閉じこもり、相手を拒否してしまうというネガティブな行動をとりがちである」と結論づけることができよう。

対人態度「回避」因子は、妬み感情「抑うつ感」「不公平感」「無力感」の3因子に正の影響を示した。これら3因子は、妬み感情因子の中でも、ネガティブな特徴をもつものであり、自ら何かしてみようという動機をもっていない因子群であり。一方、回避という対人態度とは重なるものである。対処行動との関連をみると、対人態度「回避」因子は、「拒否」「閉塞」に正の強い影響を示したことから、相手に対して強い敵意を秘めつつ、心を閉ざす可能性があるとも考えられる。本研究で得られたパス図から、対人態度の「回避」因子と妬み尺度との関連をまとめると、「相手との関わりを避ける傾向の強い者は、妬み感情が喚起される場面で相手への不公平感や不信感をもち、落ち込むような感情を経験する。そして、相手に敵意を抱きつつ閉じこもりがちに行動に陥りがちである」と結論づけることができよう。

対人態度「安定」因子は、妬み感情「対抗心」因子に正の影響を示した。「対抗心」因子は、相手に対して「悔しい」「負けたくない」「むしゃくしゃする」といった項目群であり、ポジティブな感情とネガティブな感情を含んでいる。安定した対人態度がとれる者は、他者は応答的であり信頼でき、自己は援助される価値ある存在であるという表象をもっているため、ネガティブな面からみると怒りに似た不快感情が生じて、相手に「負けたくない」といったポジティブな感情が優位になるものと思われる。その証拠として、対人態度「安定」は、妬み行動因子「挑戦」に正の影響を示した。これを対人態度「両価」因子の結果と対比させると興味深い。相手への信頼感があると不快感情を抱くものの、相手への攻撃よりは自分の課題達成に向けて行動する。相手に不信感を抱くと、相手への不快感情は自分の内に認めないのに、相手を拒否する行動をとる。対人関係をうまく営むためには、行動スキルを教育訓練するだけでなく、感情面へのアプローチも必要であることが示唆される。本研究で得られたパス図から、対人態度の「安定」因子と妬み尺度との関連をまとめると、「相手や自分に対して安定した態度を保っている者は、妬み感情が喚起される場面で相手に対抗するような強い感情をもつが、行動としては自分の課題に取り組める可能性が高い」と結論づけることができよう。

要 約

本研究の目的は、青年前期（思春期）の中学生を対象として、妬み感情とその対処行動である妬み行動を構成する因子を明らかにし、これらの因子に個人がもつ特性としての自尊心と対人態度がどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることである。妬み感情では「抑うつ感」「対抗心」「向上心」「不公平感」「不信感」の5因子が、妬み行動では、「拒否」「挑戦」「接近」「閉塞」という4因子が見出された。妬み感情や妬み行動はネガティブな特性が顕著であるといわれるが、本研究では必ずしもネガティブなものばかりではなく、ポジティブな因子も存在することがわかった。そこで個人特性としての自尊心と対人態度が妬みの感情因子と行動因子にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするためにパス解析を試みた。その結果、自尊心は妬み感情においては「抑うつ感」との間に、妬み行動においては「拒否」「挑戦」「閉塞」との間に有意な関連が見られた。対人態度尺度では両価因子

は妬み感情5因子全てで、安定因子は妬み行動の「自己成長」と、回避因子は妬み行動「挑戦」と有意な関連が見られた。これらの結果に基づいて、妬み場面に遭遇しても前向きに対処できる感情や行動と、その基盤となる自尊心や対人態度のありかたについての考察を行なった。

参 考 文 献

- Amstutz,D. (1982) Locus of control, coping behaviors and performance in a stress setting : A longitudinal study. *Journal of Applied Psychology*, 62, 446-451
- Bryson,J.B. (1991) Modes of response to jealousy-evoking situations. Peter Salovey (edited). *The Psychology of jealousy and envy*. Guilford Press
- Dion,K.K. & Dion,K.L.(1975) Self-esteem and romantic love. *Journal of Personality*, 43, 39-57
- Duck,S.(1991) Friends for life. The psychology of personal relationships second, revised edition. 仁平義明 (監訳) フレンドースキル社会の人間関係学— 福村出版
- 土居健郎 (1998) 「甘え」と「妬み」 児童心理, 52(7), 1-11
- Folkman,S. & Lazarus,R.S. (1988) Manual for the Ways of Coping Questionnaire. Palo Alto,C.A.: Consulting Psychologists Press.
- Friend,R. & Gilbert,J. (1973) Threat and fear of negative evaluation as determinants of locus of social comparison. *Journal of Personality*, 41, 328-340
- Hansen,G.L. (1991) Jealousy : Its Conceptualization, Measurement and Integration with Family stress Theory. Peter Salovey (edited). *The Psychology of jealousy and envy*. Guilford Press
- 堀洋道・山本真理子・松井豊 (編) (1994) 心理尺度ファイル—人と社会を測る— 恒内出版
- Izard,C.E. (1996) The psychology of emotions. 莊巖舜哉 (監訳) 感情心理学 ナカニシヤ出版
- 梶田叡一 (1998) 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 狩野素朗 (1980) 社会的比較過程における情動的比較と行動比較 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 25, 33-45
- Klein,M.(1957) Envy and gratitude and other works. 小此木啓吾, 西恩昌久, 岩崎徹也, 牛島定信 (監訳) 羨望と感謝 メラニー・クライン著作集5 誠信書房
- Latané,B.(1966) Studies in social comparison : Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology, Supplement 1*, 1-5
- Liberman,R.P., DeRisi, W.J., Mueser, K.T. (1992) Social Skills Training for psychiatric Patients. 池淵恵美 (監訳) 精神障害者の生活技能訓練ガイドブック 医学書院
- 大淵憲一 (1993) 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学— セレクション社会心理学-9 サイエンス社
- Oweus,D. (1993) Bulling at School;What we know and what we can do. 松井賚夫, 角山剛, 都築幸恵 (訳) いじめ—こうすれば防げる—川島書店
- Parrott,W.G. (1991) The Emotional Experiences of Envy and Jealousy. Peter Salovey (edited). *The Psychology of jealousy and envy*. Guilford Press
- Parrot,W.G & Smith.R.H.(1993) Distinguishing the experiences of envy and jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*,64,906-920.
- Rosenberg,M, (1965) *Society and adolescent self-image*. Prinston University Press.
- Rusbult,C.E. (1987) Responses to dissatisfaction in close relationships : The exit – voice – loyalty – neglect

- model. Perlman, D. & Duck, S.W. (edited.), *Intimate relationship*: Development, dynamics, and deterioration. Beverly Hills
- Salovey, P. & Rodin, J. (1984) Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 780-792
- Salovey, P. & Rodin, J. (1988) Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical psychology*, 7, 15-33
- Sarnoff, I. & Zimbardo, P. (1961) Anxiety, fear, and social affiliation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 356-363
- 澤田匡人・新井邦二郎（2002）妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, 50, 246-256
- Silver & Sabini (1978) The perception of envy. *Social Psychology*, 41, 105-117
- Smith, R.H., Kim, S.H. & Parrott, W.G. (1988) Envy and jealousy: Semantic problems and experiential distinctions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 401-409
- Smith, R.H., Parrott, W.G., Edward, F.D., Diener, E.F., Hoyle, R.H., Sung, H.K. (1999) Dispositional Envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1007-1020
- Smith, V. & Whitfield, M. (1983) The constructive use of envy. *Canadian Journal of Psychiatry*, 28, 14-17
- Sullivan, H.S. (1990) *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. W.W. Norton & Company
- 高田知恵子・高田利武（1976）能力の自己評価に及ぼすモデルの影響 心理学研究, 47, 74-84
- 高田利武（1992）他者と比べる自分 セレクション社会心理学-3 サイエンス社
- 戸田弘二（1988）青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説（working models）からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27
- 津江美和・馬場園陽一（2003）青年期の感情特性に関する研究～妬み感情の構造特性について～ 高知大学教育学部紀要, 63, 42-55
- Vecchio, R.P. (1997) Categorizing coping responses for envy: A multidimensional analysis of workplace perceptions. *Psychological Reports*, 81, 137-138
- Wheeler, L. (1966) Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology, Supplement*, 1, 27-31
- White, G.L. & Mullen, P.E. (1989) *Jealousy Theory, Research, and Clinical Strategies*. Guilford Press.
- Wills, T. (1981) Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 90, 245-271
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68

平成22年（2010）12月15日受理

平成22年（2010）12月31日発行